

「バースデイ」

—2 稿—

2025/12/31

米俵

人物表

ノア 小嶋 小嶋 原田 小嶋
太一 勝 恵理 聰美

(28) (13) (48) (41) (40)

会社員
聰美的同僚
聰美的夫
聰美的息子・中学生
新興宗教リーダー

スタッフA

1. スーパー・店内（夜）

大型スーパーの店内。客はまばら。
お弁当コーナー。**小嶋聰美**（40）、スマホを確認する。

（スマホ画面）聰美が送信したメッセージ。「今日遅くなるからお弁当でもいい?」 未読の状態。

聰美、大きな溜息ができる。

あきらめた様子で、食材コーナーへ向かう。

2. 小嶋家・玄関（夜）

中古マンション。真っ暗な玄関。

聰美、電気をつける。散らかった靴。

聰美 「ただいま。遅くなつて、ごめんね。すぐ作るから」
返事はない。

聰美、廊下に脱ぎ捨てられた服を拾いながら進む。

3. 小嶋家・リビング（夜）

真っ暗なリビング。

聰美、リビングのドアを開け、驚いた様子で、「えつ、いないの？」

その瞬間、クラッカーの音と共に電気がつく。
クラッカーを持った**小嶋勝**（48）、**小嶋太一**（13）が満面の笑みで、

二人の声、「ハッピーバースデイ」

聰美、ハツとして、「あつ、そつか」

聰美 「ほらな。言つただろ?」

太一 「本當だ。なんで、忘れんだよー」

勝と太一、おかしそうに笑う。

勝 「ほら、座つて」

と、聰美的持っていた物を奪い、雑に放る。袋からは鈍い音。

聰美、それを横目で見るが、何も言わず笑みを作る。

勝 「はい、40歳記念。大台だな」

と、さつそくのついたケーキを差し出す。

聰美、苦笑いで、さつそくを吹き消す。

勝・太一 「おめでとう」

太一 、「得意げに、

太一 「今日は、俺たちの力作」

テーブルには不格好な料理が並んでいる。

「ありがとう。豪華だね」

太一 「見た目はアレだけど、絶対うまいから」

勝 「太一、意外とセンスあつたよな」

太一 「まあね」

聰美 「楽しみだな。いただきます」

勝、太一 、ひと口食べる聰美を見つめる。

聰美 「うん、美味しい」

と、笑顔を向ける。

太一 「やつた、それ俺が作ったやつ」「俺のサポート付きでね」

太一 「いやいや、全然ひとりでいけたし」

楽しそうに笑う二人。

聰美、二人を見つめながら、ゆっくりと箸を置く。床に置かれたままのスーパーの袋。

× × ×

聰美、テーブルの上のお皿をまとめ、台所へ運ぶ。ひどく散らかった台所が目に入る。

数秒固まる聰美。

目を閉じ、大きく呼吸する。

ゆっくりとシンクにお皿を置き、台所からリビングの様子を見る。

散らかった部屋。太一はテレビゲームをし、勝はソファーに横になり、スマホをいじっている。聰美、スポンジを水に濡らし、握りつぶす。

4. 会社・室内（昼）

お昼休み。ランチに向かう人々。

聰美、動く気力がない様子。自分の席に座り、ボ-

つと一点を見つめている。

原田恵理（41）が近付け、明るく声をかける。

「何かあった？」ランチ行く？」

聰美、頷いて、ゆっくりと立ち上がる。

5. 会社・食堂（昼）

ほぼ満席の食堂。がやがやとしている。

恵理 「それで？ 聰美が片付けたの？」

聰美、頷く。

「優し過ぎ」

「そつ……かな？」

「料理は片付けまでつて教えない」と

「んー。それすら面倒で……」

「まあ、分かるけどね。やつても雑だし」

聰美 「本当ですか？」

と、笑顔になる。が、すぐに無表情になつて、

「……毎日、おんなじ。ただ過ぎてくだけ」

と、手元の紙ナフキンを何度も折りたたむ。

恵理、黙つて聰美を見つめる。

「恵理はいつも元氣で羨ましい」

と、力なく笑う。

恵理 「ね、今日、仕事のあと空いてる？」

「え？」

「私の元気の源」

と、ライブ映像を見せる。客席の熱狂が伝わる。

「楽しそう。別世界つて感じ」

「救われるよ。現実なんてどうでも良くなるから。行こう

よ」と、チケットを二枚見せる。

聰美、手元に視線を落として、

「ありがとう。でも、ごめん。今日は……無理かな」

「男一人は勝手にやるつて」

恵理、察して、

「そうかな？ また何か言われそうで……」

と、困ったような表情で笑う。

「まあ、気が向いたら来て。誕生日プレゼント」

と、聰美にチケットを渡す。

「行けないよ?」

「気にしないで。その時はまた誘うから」

聰美、チケットを見つめる。周囲の喧騒が遠のく。

6. 会社・出入口（タ）

小雨が降っている。

傘を広げる人、駅へ走り出す人がいる中、聰美だけが、立ち止まり空を見上げている。

鞄から傘を取り出そうとして、光るスマホに気付く。（スマホ画面）勝からのメッセージ。「太一、今日は友達の家に泊まるって。俺も遅くなる」

一瞬、息を呑む聰美。

すぐに恵理に電話をかける。

高揚した声で、

聰美 「今どこ?」

7. ホール・室内（夜）

座席には紫の布が掛けられている。所々、その上から白い布が掛けられている席もある。

ステージ中央には白い幕、天井からは金の布が垂れている。紫の布で巻かれた石のようなものがいくつか置かれている。

薄暗い照明の中、観客たちがぞくぞくと席につく。

恵理、慣れた足取りで進む。その後ろを恐る恐るついていく聰美。

恵理、前から二列目、中央寄りの席に腰をおろす。聰美、座席に白い布が掛けられているのを見て、

「えつ、私、ここ?」

「聰美はゲストだから」

「ゲスト?」

「初めての人は、みんな白なんだよね」

恵理

聰美

恵理

聰美

恵理

聰美

恵理

聰美

スタッフAが近付いてきて、

スタッフA「これから、お使い下さい」

と、ペンライト、ブレスレットを渡される。

聰美 「ありがとうございます」

と、戸惑いつつも受け取る。

周りを見渡し、他にも配布されている人を確認する。

恵理 「ゲストはみんなもらえるから。ほら、つけて」

と、聰美的腕にブレスレットをつける。

聰美 「「」ういうのは、買うのかと思つてた」

恵理 「「」は特別。これで聰美も仲間だね」

と、微笑む。

会場が暗くなる。歓声とペンライトの光の波が広がり、紫一色に染まる。

手拍子と共にカウントダウンが始まる。

爆音と共に幕が上がり、ノア（28）が姿を現し、歌とダンスのパフォーマンスが始まる。

歓声が一段と大きくなる。

聰美、戸惑いつつも周りに合わせるように、ペンライトを振る。

手を振るリズムに少しずつ体が乗っていく。

周囲の観客と一緒に、自然と笑みがこぼれる。

各所からノアを呼ぶ声が聞こえてくる。

ノア、「」の世界は……頑張った人ほど黙るように出来ています
舞台上のノアだけに柔らかい光の照明があたる。

ノア、俯き気味で話し始める。

ノア 「我慢して、空氣を読んで、誰かの期待に答え続けて」

静まる会場。

「

聰美、じつと聞き入る。

ノア 「それでも何も変わらず、自分が足りないんじゃないかな、

そう思つた人もいるでしょう」

聰美、真剣な表情。

ノア 「でも、違います。あなたが悪いんじゃない」

ノア、顔を上げる。

ノア 「「」の場所に来た人は、もう選ばれる側じゃない」

一拍置いて、

ノア 「「」を選んだあなたが正しい。ためらう必要はありません

ん

ノアが強い光に照らされる。

ノア 「私が味方です」

歓声が上がる。

一定のリズムでジャンプする観客。会場が揺れる。

ノア、会場を見渡す。

ノアが聰美の方を見る。

聰美、動かず、目を見開き、ノアを見つめる。

ノア、それに答えるように微笑みながら頷く。

聰美、自然とジャンプし始める。

8.

小嶋家・玄関前（夜）

聰美、スマホを確認。

（スマホ画面）ファン用「ミコニティ通知が次々届く。「『購入ありがとうございます』」「ポイント獲得。ランクが上がりました」「ノアから祝福のメッセージが届いています」

聰美、画面を見つめ、にやける。

通行人の酔っ払いが歌う『Happy birthday to you』

が聞こえてくる。

聰美、ブレスレットに触れ、嬉しそうにする。

9. 小嶋家・玄関（夜）

散らかった玄関。靴下が脱ぎ捨ててある。

聰美、バッグから紫の布に包まれた石を取り出す。

靴箱の上の荷物を端によせ、大切そうに飾る。

脱ぎ捨てられた靴下を確認し、思いきり蹴飛ばす。

聰美の口角がゆっくりと上がっていく。

（おわり）